

慈悲に聖道・浄土のかわりめあり。聖道の慈悲というのは、ものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもうがごとくたすけとぐること、きわめてありがたし。浄土の慈悲というのは、念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大悲心をもって、おもうがごとく衆生を利益するをいうべきなり。今生に、いかに、いとおし不便とおもうとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏もうすのみぞ、すえとおりたる大慈悲心にてそうろうべきと云々

第5組 天正寺住職

**嶋地 正孝**

text by Shimachi Shoukou

#### 第4章「すえとおりたる大慈悲心」

伝統的な了解では第一章から第三章までが安心を現わし、第四章から十章までが起行だと言われます。念仏往生を主題としている『歎異抄』において安心とは往生の内実であり、起行とはそこに開かれてくる生活の中の具体的課題について述べられています。一見すると、第四章には二つの慈悲が語られてあるように思えます。しかし、二つの慈悲の優劣を言っているのではなく、念仏生活の中で「聖道の慈悲」が課題となり、そのことをどこで超えていくかがこの章の内容だと思えます。

「聖道の慈悲」と聖人が使われているのはここだけです。聖人が慈悲と言われる時はほとんど如来のはたらきについてです。宮城先生は「聖道の慈悲、それが人間のまず心におこす慈悲の心であり、人間の自然な心」だと言われます。この言葉は関東のお弟子との生き合いの中から生まれた問いなのでしょう。「聖道の慈悲」には必ず助ける側と助けられる側という対立構造を生み出します。そこに問われているのは自利各別の信です。おのおの別であるがゆえに他と通じていけない、お互い身と心がバラバラに生きていくしかありません。『大経』に「無有代者」とあります。どんなに助けたいと思っても代ってやることができな。自利各別の身と心から一歩も出ることができない。そのことが諦めや言い訳にならずに人間と生まれ、生きることの悲しみになる。その「かわりめ」

に「浄土の慈悲」がはたらいているのです。

「浄土の慈悲というは、念仏して、いそぎ仏になりて」と言われています。聖人において念仏とは第十七願の「諸仏称名の願」、また「諸仏咨嗟の願」です。『一念多念文意』に「「咨嗟」ともうすは、よろずの仏にほめられたてまつるともうす御ことなり」（聖典 P540）とあり、諸仏が念仏をほめ私達に勧めて下さる。漢和辞典では「咨嗟」は「ためいきをついて嘆く」と書かれています。「無有代者」の事実の中で自利各別の身と心しかない者にこそ諸仏は悲しみをもって念仏を勧めて下さるのです。「いそぎ仏になりて」とは生死無常の身でありながら理知と分別を振り回してうかうかと生きていることを自覚せしめた如来の大悲にそう領かれたのでしょうか。決して私が死んでからという話ではないのです。

一月に有志で宮城県名取市、山元町ナガワ仮設住宅へフィールドワークに行ってきました。「北海道の夕べ」と称してカニ汁とビンゴ大会をしてきました。被災者の方々は「してやっている」という私達の根性を見抜いた上で「ありがとう」と声をかけてくれました。心配している方が実は心配されている、そんなことを思いました。「衆生を利益する」とはどうにもならない事実の中で祈りしかない人間が逆に祈られている世界に出会うことなのでしょう。

聖人は「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。」と一人の自覚に立たれました。しかし、それは業報にあえぐ一切の生死の凡夫を自分自身の内容とされたということでしょう。人間である限り対立は避けられません。対立を離れられない身と心で如来の大悲を聞き続けていく、そこに私達は「共に呻く（悲）」者として生まれていくのでしょうか。「共に呻く」ことの中に本願成就の念仏が開かれ、自他を超えて人と人とが語り合っていくのです。「すえとおる」とは行為の結果を意味するのではなく、一切衆生に仏道成就していく道が念仏なのだと言われているのです。